

## 認知症サポーター育成プログラム 第2報 こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業

小楠 範子, 木村 孝子, 徳永 龍子

### 要 旨

本稿の目的は、こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業が、学生にとってどのような意義があり、どのような課題があるのかを検討することである。

研究参加者は、平成X年に認知症援助論を受講した学生のうち、研究への同意、協力が得られた学生65名である。認知症援助論の講義最終日に認知症援助論を受講した感想や今後に向けての希望・要望について自由記述で回答を求めた。それらの自由記述のうち、認知症教育のための教材づくりと模擬授業に関する記述を抽出し分析を行った。

分析の結果、＜認知症についての再学習と再確認＞＜学んだことを生かす意欲の高まり＞＜認知症について伝える意欲の高まり＞＜経験の広がりのうれしさ＞＜時間不足に伴う不全感＞という5つのカテゴリが見出された。

認知症援助論の授業構成の中に「認知症をこどもたちに教える」という視点を盛り込むことは、結果的に学生の認知症に関する知識を高め、認知症の方とのかかわりへの意欲を高めることにつながる事が示唆された。一方で、「認知症」にはじめてふれる学生にとっては、認知症やそのかかわりを理解するだけでも難しい課題であり、それをこどもたちに伝えるという課題は更にハードルの高い課題であることが示唆された。学生各々の経験の背景など個人差を踏まえた丁寧な指導が求められる。

**キーワード：**認知症サポーター、認知症、模擬授業、児童、生徒

### I. はじめに

平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)において、「認知症教育を通した人づくり・町づくりーいのちの尊厳に溢れた、やさしさの網の目づくりを目指してー」という取組が採択された<sup>1)</sup>。

これは本学が位置する薩摩川内市の特徴、すなわち、高齢者世帯と独居老人の増加に伴い認知症高齢者も増加している地域特性に応じた取組である<sup>2)</sup>。この取組は三段階の構成となっており、第一段階では「認知症援助論」「認知症援助論実習」を開講し、学生を中心に認知症サポーターの育成を目指した。第二段階ではこどもを通して市民の認知症への理解の輪を広げることをねらいとし、「認知症援助論」「認知症援助論実習」を受講し認知症サポーターとなった学生を中心に、小・中・高校生(以下、こども)を対象とした認知症教育を展開した。第三段階では、認知症サポーターの学生を中心にボランティア活動を行い、地域にやさしさの網の目が広がり、認知症の高齢者が安心して暮らせる共生の町づくりへ貢献することを目指した。

認知症サポーター育成プログラム第1報<sup>3)</sup>では、認知症サポーターを育成するために立ち上げた「認知症援助論」「認知症援助論実習」の概要について報告した。第2報の本稿ではこの取組の第二段階である“こども

を通して認知症の理解の輪を広げる取組”への橋渡しとなる認知症教育のための教材づくりと模擬授業に焦点をあてる。

本稿の目的は、こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業が、学生にとってどのような意義があり、どのような課題があるのかを検討することである。

### II. 研究方法

#### 1. 研究参加者

平成X年に認知症援助論を受講した学生のうち、研究への同意、協力が得られた学生65名。

#### 2. データ収集方法および分析方法

##### 1) データ収集方法

認知症援助論の講義最終日に調査を行い、認知症援助論を受講した感想や今後に向けての希望・要望について自由記述で回答を求めた。調査用紙は参加者に直接手渡し、教室に回収箱を設けて回収した。

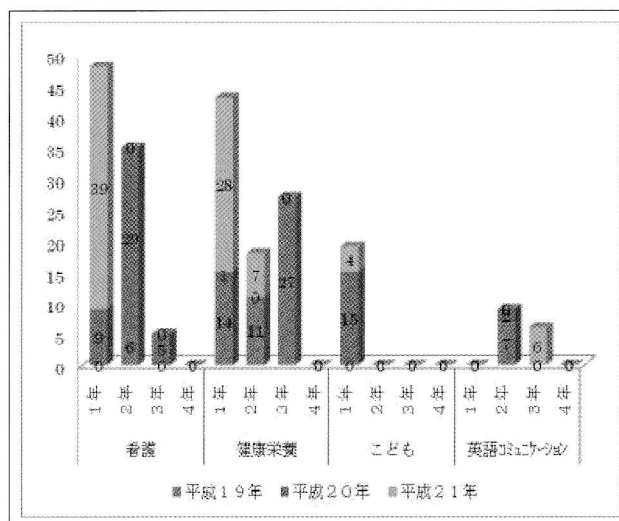
##### 2) データ分析方法

認知症援助論を受講した感想や今後に向けての希望・要望についての自由記述のうち、認知症教育のための教材づくりと模擬授業に関する記述を抽出した。その上で記述を類似の内容毎にまとめ、カテゴリー化していった。

表1 「認知症援助論」講義展開計画

回	授業テーマ
1	認知症サポーターとは、ボランティアとは
2	老いとは・認知症とは（中核症状・周辺症状）
3	認知症を持つ人の気持ち・家族の気持ち①
4	認知症を持つ人の気持ち・家族の気持ち②
5	グループワーク、ロールプレイ
6	グループでのロールプレイ
7	高齢者の食生活
8	生活機能とかかわり方ー最後まで自分らしく生きるために①
9	生活機能とかかわり方ー最期まで自分らしく生きるために② 関係機関とのネットワークづくり
10	児童・生徒に向けた教材作り
11	児童・生徒に向けた教材作りと実践に向けて
12	指導案・教材づくり（グループワーク）
13	指導案・教材づくり（グループワーク）
14	模擬授業の発表
15	模擬授業の発表とまとめ

表2 「認知症援助論」三年間の学科・学年別受講状況



### 3. 倫理的配慮

研究参加者には研究の趣旨および方法について説明し、研究参加を断っても成績には一切関係のないこと、研究以外の目的でデータを使用しないこと、得られたデータは個人が特定されないよう配慮する旨を伝えた。調査は無記名で行い、用紙の提出をもって研究参加への同意とみなした。

### Ⅲ. 認知症教育のための教材づくりと模擬授業の展開方法

結果を述べる前に、認知症教育のための教材づくりと

模擬授業に関連した認知症援助論の展開方法と実際について述べる。

#### 1. 認知症援助論の展開方法

認知症援助論は人間の成長を促す領域の選択科目として位置づけられており、平成19年度より全学科の学生を対象に開講された。この科目のねらいは以下の4点である。①認知症を持つ高齢者に対する理解を深め、認知症の高齢者の幸せについて考える。②認知症高齢者に尊厳をもって関わることのできるよう、知識と実際の援助方法・認知症の予防について理解する。③上記の知識と援助方法をもとに、小・中・高校生に対する出前授業ができるよう、授業案作りについても具体的・实际的に学ぶ。④必要な時にボランティアとして活躍できるよう関係機関との連絡調整やネットワーク作りについて学ぶ。

講義はこのねらいにそって組み立てられており、前半では認知症について基本的な知識や接し方について学ぶ。そして、前半の講義内容を土台にしながら、後半でこどもを対象とした「認知症教育」が展開できるよう15コマのうち後半の6コマを認知症教育のための教材づくりと模擬授業にあてている（表1）。

#### 2. 3年間の認知症援助論受講状況

認知症援助論は全学科の学生を対象にした選択科目であり、平成19年度に開講した。平成19年度から平成21年度の3年間の受講状況は表2に示すとおりである。特徴的なのは、初年度に比較すると2年目以降は1年生を中心に低学年の学生が増えていることである。受講者数については、平成19年度から平成21年度までの3

年間で210名が受講しており、内訳は平成19年度65名、平成20年度61名、平成21年度84名であった。

### 3. 教材づくりと模擬授業の展開方法

本学の教職科目は2年生以降に開講されているため、認知症援助論を受講する学生のほとんどは、教職科目を受講する前に認知症教育のための教材づくりと模擬授業に取り組むこととなる。したがって1年生であっても取り組みやすい教材づくりと模擬授業の進め方の工夫が求められる。一つの工夫として、学習指導案の中の授業の展開についてはシナリオ形式にすることを試みた。また、学習指導案の例を提示し、それにそって教員が模擬授業を実施することで、学生が教材づくりや模擬授業をイメージしやすいように工夫した。

受講者数が多いため、教材づくりと模擬授業はグループ単位で進めた。各グループの持ち時間は20分とし、テーマ設定や授業展開方法についてはグループでの話し合いによって決定していくこととした。初年度は学科や学年を超えた学生の交流を意図して、学科と学年を混合したグループ形成とした。しかしこれは学科や学年を超えた交流ができる反面、授業以外でグループの意見交換をする機会がづくりにくいというデメリットがあり、2年目以降は初年度の学生の意見を反映させ、同学科同学年でのグループ形成で進めていった。また教員も2～3名の複数体制をとり、学生のグループワークをサポートする形をとった。

### 4. 学生が作成した教材と模擬授業の実際

学生が作成した教材は紙芝居や紙人形など実に様々であり、子どもたちが興味をもって認知症について学ぶことができるよう配慮されていた。

例えば、認知症高齢者の生活の困りごとを紙芝居を使って子どもたちに伝えようとしたもの(図1)や、認知症が脳細胞の病気であることを子どもたちに分かりや

すく伝えるため、脳の中を1件の家に例え、部屋のひとつひとつを脳細胞に例えながら認知症について説明したものなどがあった(図2)。また、子どもたちに馴染みのあるアンパンマンなどのキャラクターを用いながら、子どもたちに認知症について分かりやすく話す授業展開の工夫などもみられた。

## IV. 結 果

認知症援助論を受講した感想や今後に向けての希望・要望についての自由記述のうち、認知症教育のための教材づくりと模擬授業に関する記述を抽出し分析した結果、〈認知症についての再学習と再確認〉〈学んだことを生かす意欲の高まり〉〈認知症について伝える意欲の高まり〉〈経験の広がりのうれしさ〉〈時間不足に伴う不全感〉という5つのカテゴリーが見出された。以下、各々について述べる。なお、「」は学生の記述内容であり、( )は記述内容を補うために研究者が追加したものである。

### 1. 認知症についての再学習と再確認

〈認知症についての再学習と再確認〉は、子どもたちに認知症を教えるという立場に立つことで、講義の前半で学習した認知症の知識やそのかわりを学生自らが学びなおし、再確認していることである。

学生にとって模擬授業は「前半の授業の総復習」の機会であり、認知症について子どもたちに伝えるという発表の機会をもつことで学生は「認知症のことを最初のころよりも多く理解することができた」と感じていた。

「(子どもたちに伝えることで)認知症をあらたに理解できた」という記述もあり、子どもたちに伝えるという立場に立つことで、学生は認知症についての理解のあいまいな部分を学びなおし、正確な知識を習得していた。認知症教育のための教材づくりと模擬授業は学生にとっ



図1 ヨネさんの一日 (学生が作成した紙芝居の一部)

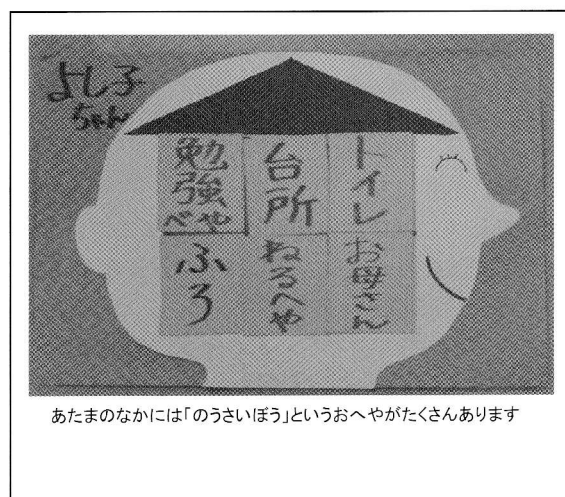


図2 脳細胞を部屋に例えて認知症を説明する授業展開例 (学生が作成した教材の一部)

て、学習態度の変容の機会でもあり、認知症について受動的に学ぶ姿勢から能動的に学ぶ姿勢へと移行していることがうかがえた。

## 2. 学んだことを生かす意欲の高まり

＜学んだことを生かす意欲の高まり＞とは、認知症教育のための教材づくりと模擬授業を経験することで、認知症の人へのかかわり方がより具体的にイメージでき、学んだことを生かしながら認知症の人とかかわっていきたいという意欲がかきたてられていることを指している。

学生は「どのようにすれば認知症の人に不快を与えないですか」を考えながら模擬授業の準備をしており、その視点に立ってグループで話し合いをしたり、他のグループの模擬授業を見たりしていた。学習を積み重ねることで「認知症の方に接するとき、どのようにすればいいのかよくわかった」学生は、「認知症の人をしっかりサポートしたい」という意欲が高まり、「認知症の人に会ったらやさしさをもち接していきたい」と、学んだことを具体的に生かすことを考えていた。また、認知症の祖父母と一緒に生活している学生は「(学んだことを認知症の)祖父とのかかわりに生かしていきたい」という意欲を示した。

## 3. 認知症について伝える意欲の高まり

＜認知症について伝える意欲の高まり＞とは、認知症教育のための教材づくりと模擬授業を経験することで、認知症についてこどもたちに伝える意欲がかきたてられていることを指している。

学生はこどもたちに教えるという立場にたって認知症教育のための教材づくりと模擬授業を経験することで、その学習内容を「日常的に役に立つ知識」と実感していた。そして、「自分が得た知識は自分の周りの人にも伝えていきたい」と願っており、認知症の人が住みやすい町づくりのために、自らが動くだけでなく、周囲を巻き込んでかかわっていききたいという意欲が表現された。

## 4. 経験の広がりのうれしさ

＜経験の広がりのおもしろさ＞とは、認知症教育のための教材づくりと模擬授業の経験そのものが新鮮であり、今までに経験したことのないことにふれたことを喜んでいることを指している。

「模擬授業」は、今まで講義を受ける立場にいた学生が、人に教えるというこれまでとは全く違った立場に立つ経験であり、今までにない「いろいろな経験」をする機会であった。新鮮な経験をした学生はその経験そのものを「よかった」と感じており、講義全体を肯定的に受け止めていた。

## 5. 時間不足に伴う不快感

＜時間不足に伴う不快感＞は、認知症教育のための教材づくりと模擬授業にあてられている時間に不足を感じ

た学生が、その経験そのものに不快感をいただいていることを指している。

学生の中には「(認知症教育のための教材づくりのための)時間が足りなかった」と感じている者もあり、「時間があつたらもっといいもの(もっといい模擬授業)ができた」という不快感をかかえていた。

# V. 考 察

## 1. こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業の意義

学生の記述からは、＜認知症についての再学習と再確認＞＜学んだことを生かす意欲の高まり＞＜認知症について伝える意欲の高まり＞＜経験の広がりのうれしさ＞の категорияが見出された。これらは、こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業の成果といえる。

こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業を展開することは、学生が認知症を教員から受身で学ぶだけでなく、能動的に学ぶ姿勢を育む機会であり、認知症の知識を再確認しながら、学んだことを生かす意欲を高める機会であったことがうかがえる。本取組では、認知症の高齢者の幸せについて考え、尊厳をもってかかわることのできる学生、すなわち、やさしさと知識、実践力を備えた学生の育成を目指した<sup>4)</sup>が、15コマの授業構成の中に「認知症をこどもたちに教える」という視点を盛り込むことは、結果的に学生の認知症に関する知識を高め、認知症の方とのかかわりの実際、すなわち実践への意欲を高めることにつながったといえる。

こどもを対象とした「認知症教育」は、単にこどもを通して市民の認知症への理解の輪を広げるだけでなく、その教育に携わる学生の認知症サポーターとしての意識や具体的な活動意欲を高める要因になり得ることが示唆された。

近年、認知症の人を支える取組として、認知症を題材にした絵本なども出版されており<sup>5) 6) 7) 8)</sup>、認知症についての理解者を増やすことを目的にこどもを対象とした認知症の学習も徐々に展開されている<sup>9) 10) 11)</sup>。また、細川ら<sup>10)</sup>は小学校の総合学習の中に「認知症」の学習を取り入れた成果についても報告している。しかしながら、これらの報告は学習者であるこどもにとっての意義を考察したものであり、こどもたちに認知症を教える側の意義については触れられていない。本研究は認知症を学ぶ側から教える側に立場を変えた学生に焦点をあて、その意義をあらたに示したといえる。

## 2. こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業の課題

学生の記述からは、＜時間不足に伴う不快感＞という

カテゴリーが見出された。

認知症教育のための教材づくりと模擬授業のためには15コマ中6コマをあてたが、「認知症」にはじめてふれる学生にとっては、認知症やそのかわりを理解するだけでも難しい課題であり、それをこどもたちに伝えるという課題は更にハードルの高い課題であることが示唆されたといえる。認知症について学んでいく速度は学生それぞれであり、各々の経験の背景など個人差を踏まえた丁寧な指導の必要性が求められるといえるだろう。

平成19年度よりスタートした認知症援助論は、平成19年度65名、平成20年度61名、平成21年度84名と受講者が年々増加しており、しかも受講する学年も低学年化しているという特徴があった。学生のグループワークをフォローするため、教員も2～3名の複数配置をとるなどの配慮を行ったが、学生のニーズにこたえるには限界があったといえる。

本学で開講されている認知症援助論は、看護学科だけでなく全学科の学生に開講されたものであり、認知症についてほとんど知らない学生も受講している。今後は学生の学びの環境を整えるという視点に立ち、学生をサポートできる教員数との兼ね合いも検討しながら受講する学生数についても検討していくことも課題の一つといえる。

## VI. 結 論

認知症援助論の講義の中で行われているこどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業が、学生にとってどのような意義があり、どのような課題があるのかを検討した。その結果、学生にとっての意義として、＜認知症についての再学習と再確認＞＜学んだことを生かす意欲の高まり＞＜認知症について伝える意欲の高まり＞＜経験の広がりへのうれしさ＞というカテゴリーが見出され、課題としては＜時間不足に伴う不快感＞というカテゴリーが見出された。

15コマの授業構成の中に「認知症をこどもたちに教える」という視点を盛り込むことは、結果的に学生の認知症に関する知識を高め、認知症の方とのかかわりの実際、すなわち実践への意欲を高めることにつながるということが示唆された。一方で、「認知症」にはじめてふれる学生にとっては、認知症やそのかわりを理解するだけでも難しい課題であり、それをこどもたちに伝えるという課題は更にハードルの高い課題であることが示唆された。認知症について学んでいく速度は学生それぞれであり、各々の経験の背景など個人差を踏まえた丁寧な指導の必要性が求められる。

## VII. 研究の限界と今後の課題

本研究結果は講義最終日の自由記述の分析に基づくも

のであり、こどもを対象とした「認知症教育」のための教材づくりと模擬授業を体験した学生の思いが十分に表現されているとは言い難い。特に＜時間不足に伴う不快感＞を表現した学生については、自由記述だけでなく、学生の声を直接インタビューで聞き取りながら、学生にとっての学びやすい環境について検討していく必要があるだろう。

また、こどもを対象にした授業を実際に行うことで、教材づくりや模擬授業の体験の意義が変化すること考えられる。今後はこどもを対象にした授業を実際に行った学生の体験にも焦点をあて、分析していく必要がある。

## 謝 辞

研究にご協力いただいた研究参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 文部科学省 平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定結果について(報告) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/07/07072005.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/07/07072005.htm)
- 2) 木村孝子:認知症を取り巻く現状から:認知症サポーターの必要性. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 12:1-7, 2008
- 3) 木村孝子, 小楠範子, 徳永龍子:認知症サポーター育成プログラム 第1報. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 13:1-6, 2009
- 4) 前掲書1)
- 5) 加藤伸司(監修):ぼくのおじいちゃん. 第1版, ワールドプランニング, 東京, 2006
- 6) 本間昭(監修):おばあちゃんどこいくの. 第1版, ワールドプランニング, 東京, 1992
- 7) 認知症ケア研究会:いつだって心は生きている. 第1版, 中央法規出版株式会社, 東京, 2006
- 8) 一番ヶ瀬康子(監修):高齢社会って, どんな社会?. 第1版, くもん出版, 東京, 2001
- 9) NPO 法人地域ケア政策ネットワーク全国キャラバン・メイト連絡協議会:認知症サポーター100万人キャラバンによる地域づくり事例集:戦略と展開. 第1版, NPO 法人地域ケア政策ネットワーク全国キャラバン・メイト連絡協議会, 東京, 2008
- 10) 細川淳子, 金子紀子, 前田充代, 天津栄子, 松平裕桂, 金子克子:A 小学校の総合学習に「認知症」の学習を取り入れて. 石川看護雑誌, 6:53-58, 2009
- 11) 山崎龍二, 西川勝:子どもに対して認知症をどのように伝えるか 子どもを中心とした認知症ケアのコミュニティ創造のなかで. ホスピスケアと在宅ケア, 16(2):182, 2008



## Training Program for the Supporters for the Cases of Dementia Report 2 Making Materials for 'Learning about Dementia' Class for Children and Giving Sham Lessons

Noriko Ogusu , Takako Kimura , Ryuko Tokunaga

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : supporters for the cases of dementia, dementia, sham lessons, pupils, students

### Abstract

The aim of this report is to examine how significant it was for the students to make materials and give sham lessons of 'learning about dementia' class for children and what problems are still left to be solved.

The participants of this investigation are 65 students who took 'Caring for Patients with Dementia: Theory' in the academic year of 20XX. In the last class of this lecture, they were asked to write freely how they felt about this class, what they expect or wish for the future classes. Out of these comments, those which concerned making teaching materials and giving sham lessons of learning about dementia were chosen for analysis.

The result of analysis showed that the comments could be divided into the following five categories; reviewing and reconfirming what they had learned about dementia; increase of the wish to make good use of what they had learned; increase of the wish to propagate the knowledge on dementia; the joy of broadening experience; frustration caused by lack of time.

These suggests that to bring into syllabus a view point of 'teaching children about dementia' enhanced students' knowledge on dementia and made them more willing to care for the patients with dementia. On the other hand, it has also become clear that for the students who contacted for the first time with the patients with dementia, it was a hard task to understand dementia and matters related to it, and so it was even harder target for them to communicate such knowledge to children. In this field, careful and considerate guidance is required, taking into account the different background of each student's experience.

---